三國一夜物語

13
3022
3

3022
3

富士浅間三國一夜物語巻之三

東都　曲亭馬琴著編

第三編　駿河の小雪尾張路の櫻の支

富士右門知之ハ五四郎が為の女兒小雪を誑りとりて只管憤ゐ堪ざるを事終ゐせんとゑけまバ富士太郎りろともゐひきゝ家のうち來て三雲ゐちゝぐの物がたりも三雲ハ嚮ゐ夫が五四郎を追行しりとゝろ更ゐ安うらでゆくゝびゝ門邊ゐ停立其方を眺望ゝたゝしるが今ゐ言を聞とやがて泣ゝうるゝゝて曰ゝ物をも辨へぎるゐ拭へども落る涙の隙よりのゝりけゝハさても世の中ゐ浅ましきハ女子ぞゝ縱證左ゝまるゝの有も夫のゝゝり來ままを待ぎ。その人のゝふがまゐゝ。女児を遁与ける愚ゝよ

然るべきもの〜活るもの子ゆゑに憂を忘れ水のまゝにぐらふるひいあまつ
過しかひなかりそ。さて往方まぼろうて。後の富貴もいかゝ我身と
富士太郎い浴へ上らべ上りうゑ吾身い残りそまうて月星に面ぬ時もも。
小雪ゞ先途を見究ひべ〜。もしへ悔〜面ゐ〜をうらぬるを繰返と倭文の
小手巻なるく〜ゐ心も乱るくぞうう。右門も道理とおもふものゝ。
験あべ〜きつくのゆう。ゐ身ゞ愁傷さうのるまどよく思ひつきまえ。我
此度不意幸福を得て〜と。強て富貴をねゞゆゆめぞ只父祖の恥を
雪ゐ。絶うる家を興まる時をうるべを思よのゝ。ちうを今らの一事ゆうつう
ひて。女兒ゞ往方頓ゐまぼ。遅桑の罪脱ぐく。是大うる不忠うう又國
主の威徳を借て速ゐ五四郎を捕るとも。彼も口のまべうゞ相傳の秘書を

質とーうるうるゞをもゆべ〜。〜ちうの洛ゐ聞えそ。身を離をまぐきものを
え典物とうーゆうゐ屋けきものうと憎ゝおゞさゞ君罷立地ゐ衰へ。業
枯掌を覆を如けん。是枝を繋て樹を死〜。角を切て牛を斃まの悔ぞう〜。
縦五四郎小雪を領て遠く逃ま奔るとも。とさえぐ唐山の果まぞゐよも往ど。
命ゆぞうくゆううゞ。環會でゆゐ已べきいく〜ゐ歎きゐひそ。と言を竭して諭
ぬど。三雲のゆく泣ていゆう。うるうるとゆるうゆゐ。洛上つのうゐおゞも。くゐ
ちうせてゆく〜べきゐ思ひうーとそのうゆゐ別。うく今の今まぞゆ。ほるのゞゞんゞう
もせぞ。貧き親の便うきゐ子を賣ゆうると思ひけゆまぞて少女を奪ら合い。
うるうぞ妓院ゐ持て行て居多の金ゐ代るとき〜。彼ゆ〜遊女とう果〜ゆ。
飲浮ゐ酒も飲うひ。ちゐゐ落も殴やせん。他〜枕をえ竹の夜ぞゐ繁紀を

生平と共に孰れも岩橋の契いさゝかつゝがなくもあるとも親の為ゆゑ思ふ日来の孝行を憐む神も佛も在ぞ活地獄に墮ゐるべいなく世の報ひぞと。くり口説く泣とゞろ。右門いきとゞろ。富士太郎も諸ともに。こゝろ〳〵諫ゝらんで。俄頃に従者を傭ひ行装を整て次の日啓行の途を國守巡範に受へまゐらせ。三雲を轎に扶乗せて西を望てぞ旅ぢけるゝ。小雪なも将てゆびいろふ是〳〵ゝるべきゆと。思ひ流石故郷の餘波もいぶ惜まれて。夜鶴の子に後れ雙雁の友を喪へるに異ならぬ。何とく足もまゝまうねど。名ゞ志を勵し。途にそゝの人にあひやと思ひ〳〵ぶ右門も富士太郎も轎に乗らぞ。徒より〳〵七日目とゆく程に日を経て遠三河両国なも過ぐる尾張なる熱田も近く鳴海野や。誰喚續の濱辺を行に

ヒの日い小雨雫ふりて。秋の日の暮やすく。軒端に迷ふ雀色時にもなりぬ。けふの泊なも遠ゝらぬとて只顧路をいそぐ折しも。街曲のくさよと鈴の音高く聞え荷鞍の上に人を乗て來る馬あり。けりとの馬右門がやうをつと行ちぶ時。馬上の人足をとして。右門が肩を丁と蹴る右門勃然そ膽まぶ。その人布衣ロのゆうを縛標笠をあゝ〳〵七大る雨衣を被なまぶ楚〳〵見えこゝろねど。今蹴出〳〵る向脛の白やうるゝ全く女子と覚きぶとの馬に引副てゆ〳〵男も手拭して面を掩ひふる笠をうち戴てゝるなる菅簑を被る形狀五四郎に肖てけまぶ。右門忽地胸うち騒ぎ乗らまてゆくゝこぶ女児をうべきゝ彼今のゝうるハねバ足をとして教ゝうハと思ふ。ちぶ〳〵も躊躇へまゐゆらぶ。富士太郎に注目しゝ先彼男を

引捕てその面を見んとするふとの男大ゐ驚きふり放ちて逃ゆくぬぞまへ
見るりとうれしくて追ひつも声をふり立賊めゝくと呼ふけ馬士も見ゐ
害怕て忙しく馬を追やひゝろとも逃まんとすを。富士太郎走り蒐りて。
その腕を無手と採向背へ探着て動せず。富士が従者とも光景を見て何
事と思ひ辨ねど一人い馬の轡づるを駐め一人い主とも彼男を追
蒐ねるふその頃當国へ管領斯波義将の采地ゆそその身へ洛ゐゆと
ゆどもこの地方東国の咽喉ふふ。盗賊悪徒の防禦ゆと厳重ゆそ今
右門が賊めりと呼る声を聞て。浦壇の番士走り来ふ忽地とれを捕め
捕ゐけゑび右門いゆ公おちゆて番士ゐ對ひ禮義を正しゆ。
駿河ふる富士右門とゆるものゆそ此度台命を稟妻子を携て洛へ赴く

前日ゆまふる男が忻りて女児小雪を奪去りぬ。元来彼い何国の者ふを
ゆらぬぞ。名を五四郎とゆふ。ふるゆ故郷ゆそ。穿鑿ゆまく思ひふゆ召ゐ應ド
たる身の公ふらぬも旅ぐらしゐ今この浦曲ゆそ行あひつまゆ。ゆまいち引
捕んとゆふゐ彼いちやく逃去しを不意も国守の威徳ゐふりて輙く
彼を捕得女児をふり復しいふふゆ雀躍言葉ゐ竭しゆゆ番士ゆそ
足下上洛のふゆ豫て泰範候よりその少女をゆりて美ゆ見ふ又五四郎と
やらんゆふ東海道ゐふる癖者徘徊して少女を奪ふし風聞ゐゆ
ふらぬ。吾儕ゆまを獲ふふ足下のゆふ天下の民の害を除く公私の僥
倖ふ。ふるゆ者奴ゐ法の如く行ゆ。足下い今弱を捕て速ゐ過ゆ
ふしゆゐ右門ゆまふく歓びゆまゆ三雲富士太郎ゐゆふのゆを語ふ

熱田の
容店ふ
櫻子故を
語る

る間に番士は彼馬士をも犇々と縛けり。三雲は女児さを復しゐるを聞て轎の裡より轉び出やよ小雪且くも憂に沈むさを物〳〵あとつらめるを母が愚なるより。愛子をばうゝ〳〵ひていつを限りのあは日とも思ひもてあくがれゝ。親子の因うきをうらぬ熱田の神の恵ゆや。奇〳〵とゝふ會ねるは罕なる幸ゆてけるとく下りくちて顔見せよといふもいそ〳〵鎧着の左右に立めぐるこの時已に日も暮〳〵べば。右門は番士の松明を借てふり〳〵女児を馬より扶おろして。雨衣を脱せ笠をとり猿轡を外せしふこゞ子ゆめゆゞ。あて年紀は小雪に似〳〵ども次女はそまゝ〳〵ちまうていと艶なる少女の。白き赤き櫻花を摺もろ。罩衣の袖長きを被り涙さ〳〵そつゝあさまべ。こゝ〳〵ふと呆まとそ。親子三人顔うち瞻て夢に夢見る心持せり

右門はさそ悔ぬとのゝまく〳〵せしが。忽地声を高ゆふしてのよまう。小雪今は親兄弟ゆも逢ぬまべ。伊の歎くるやめる會話は今宵の宿ゆそまべ〳〵。誘うゝ勵薦もろ手をとりて引立つ。番士は厚く謝して。熱田のうゝ過るとき。目をそゞひゆして捕まうる男を見るゆこまも五四郎ゆ。めゝを。面黒く眼圓ゆ。鎌髭のりゆ〳〵。生出うる荒男なれば。影護て足たゝく走りうるゆ三雲も富士太郎もそのところを浮ぎまべ。ま〳〵〳〵疑ひ惑ひゐら。故ゆうぬべく思ひ〳〵べとふて向ひ諦ぎ後方に立てゆ〳〵ひどふをの夜は熱田の坊に宿りぬくて右門はをの夜さう従者を遠ざけ。親子一室に圓居して。彼少女はいとうゝ〳〵れ今日は身を救ひてとふ伴ふゆと奇くも思ひうるんがこれゆへうゝき故

あるひ。まづその仔細を語るべしとのいひて。此度室町殿の召に應じて洛へ上るの。女児小雪を五四郎に誂りやらはしるのをぞ。説話てのよう。常言に暗に疑べ眼に鬼を見るといふがごとくにて只顧女児に逢まく思ふの故に審にも認とるぞ。也身を小雪ぞと思ひ誤りて。彼男を追蒐ぶ。憑に番士の手を借りて是を捕てやと晴がましきことをぞ。今更小雪にあらぬぞといひて。長く麁忽を笑ひたんも面ぞ。さてとそ子のかりちしてら〳〵伴ひまるるれ。定て洛の人みどに。拐掣さまとるひと。あるべ。親也の名をも告らず送りまゐらせんとのふに三雲も富士太郎。かうまくその意を清て。右門が慮の浅らざるを感じけり。少子ハ飽まで泣ある人の言葉を安く毎に。ゆく泣をぶちてありける。且〻て

いふ。鄙に救はまゐらせしようこぞうえも物ぞうそ。頼を安えんと思ひ。うはーくも問せらるふものを。何を匿付らん。吾身ハ南朝の大将橋本治部丞が女児ぞ。名を櫻子と呼はれ。父ハ前年陣没して。親屬。ぞ紀路に屍を曝しるるぞ。ぞ。家臣村主兵助とのふ夫婦のものに扶掖はれ。らくしど城を逃出らの二とせ。熊野の山里に立潜びぬるど。且開の烟さそうれて。主従飢に臨んとまるべ。一日兵人がのふ。らの地にあるう。邉鄙なるぞ。世ぞるに便あり。関の東に。ぞ新田殿の族も在まと安バ去来東へ倶して下るべしとのふ。仔せ。主従三人其慮を旋立て和泉と津国の堺るるこるさの松原まで来るとき兵人が妻の老曽俄頃に病て道の

次ふうちふしぬ折しも貯さる藥剤もみけまば。兵衆ハそを買ひて来ん
とそ口ふいう元の路ふとちうえう。ことうに老曽を勧りて悪も去らぐ在つる。
彼荒男が来うつそ。こうきく引立ゆうんとも。老曽ハ雄こーき老文うれば。
病つも彼が裳を楚と握留て放をとるく。まぐく声を揚ぬまど里えう
遠き林原の行うふ人もぐ人ーぐ要ふ助る人もるー。荒男ハ大ふ怒り。
氷るを刀を抜て老曽が向背を丁と砍まば。噫と叫びて仆る間ふ。ゆがて
こうつを小腋ふ抱き。東を望て走り去り次の日淀とうふ地方まで来うう
ちふうねて入洛へ将て上らんとも思ひけ。洛ハ近曽四の出口ふ屬詑ー。
りつぐう賊を捕るをいバ。彼處へゆうんハ危ーとひとうどちそ。こうハを
馬ふうさ乗せ旦ゆハさやく出タゆ遅く宿りるれ只管路をいそぎぬ。

さまどこうとぶが人を見べ声を發んるを怕まけん。そどるうより布をうそ
口をうく括標笠をふうくーて面を覆ひ馬士ゆ錢おりくさせて人うき
郊原をうる時布を緩て些の食物を与ーゆふいくさくの人ふゆとと
いども救ひを求るふうーうーふけふーも此身こが乗らまうる馬の
ひとうをゆぐさうるひーうぐ無禮うとハ思ひうぐう。足をりて告まるう
せーふも身も又その子を索ゆ折ゆそうく救まるうせーハとうるき身の
僥倖ふけう。彼兵衆へいふまうふん老曽ハ死やまうると思ふ。棚ゆー
船の舵を絶て憂ふぐるくのまうるぐ今ハとまがもうるき身うをゆまうく
ゆもうまきふ謀てゆ思うーとう声も心ひそげうる。三雲ふうく憐まそ。
こううぐ女児ひど幸うき。ゆうーを思ふ。吾身一ッの秋うぐ今其

ことを聞くまで痛へ〜くもいと悲く付ることまさる世の縁ゆーるべ仇〜
事ともおもひ〜ぞ。いふこゞ夫さへおぼさぬらこの姫を勅て今の便をを
救ひまゐらせば。その報ゆそこゞ子ゆも。環會するのもせん。とまれくまゐ
洛まゐ。伴ひ〜ぞうーとのふ。右門且く沈吟して。橋本氏へ南方の大将
うーを。その女児ゆ方人共。後難量ぐーをのゝども。近曽南朝北朝
御和睦ゆるべきよう。その必えあり。殊更女子のうるまゐさのゝ忌憚
ゆも及ぶまじ。窮鳥懐ゆ入まゐ。鵠師もとゞぎといふうこまも又人の子ゝ
いくぐ棄るゆ忍ぶべきまゞ洛へ倶しゝゆきとのう上聞を経てともくもぞ
あとのゝ櫻子ハさうゝ三雲もいと敬びてその夜へ互ゆ語り明しける。不題
櫻子を拐契う荒男へ播磨の郷四郎とのゝ賊うーゞ五四郎と郷四

郎と和訓も遠くざるゆその積悪も脱ぐ〜くて。終ゆ首を刎らまゐ馬
士ハ鞭うまそう。〜ゐ命を助りーゞ。案下某生再説右門ゆハ詰朝
熟田をもて路を走ると三日ゆして遂ゆ洛ゆ上り着。その日室町殿へ参
ゐそ参着を告なり。家の記録ども残らぎ呈上を義満公まゐら御
覧ざるゆ樂譜のうち笙の巻うる大食入調の両曲ハ寛治元年十月
下旬。新羅三郎義光朝臣奥州下向の時足柄山ゆて樂人豊原
時秋ゆ傳へゆ所の秘決ゆて。源家ゆもかてハいと愛ゐき奇書ゐ。
今改めて頭ゆうまゐ秘藏ぎきよりを命せらまゐて。記録ゆとゞく
返〜下さまゐ。加之攝州住吉郡のうちゆて二百貫文を領ぎまゐ條。御
教書を賜ゆければ。右門ハ三世の愁眉一時ゆ開けて深く君恩を拜

謝し。聽て津國に赴きて墨江のわたりに第宅を修理妻子をもこゝに呼下して住ごゝろ。その身い折〻洛へ上りて室町殿に参り仕へ。義滿公その誠心を感じおぼし。浅間照行に命じ。富士が家の重器なりける高峯の太鼓を返さるゝに照行大に迷惑して固辞なりしかど君命終に辺るべくもあらで彼太鼓を出しけるぞ。これ富士を憎むとぞ。津國に住ごろ私に面を會せるのみ。さるど照行へ年も弱くて。のまず妻をも娶らず。殊更父ゆへ。後は母の卯原が養育ましますに。已が隨意に進止音律のゆへ外にして。職ゆもあらぬ剣法をまなびなどして。一人の龍忽なる男ありける右門父音律に曲きのみるもの。儒學は江家管家の流を汲て武術は義家

朝臣の蹟を慕ひ。その年は初の老ふるそのつゝら長者の風あれば。[illegible]

第二回

右門のこを招きて。[illegible]

机事をたづね。諸家の舞樂をゝるゝど。右門のこを招きて。[illegible]

あまどもるきが如くなりぬ。右門いとの序をもて。管領義將に櫻子が

ものを訴へ申せしかば義將ゆて披露あり。両三日の後右門を召て南朝の

残黨とのゝども。女子は公の沙汰に及ばずとて櫻子を你に下し給へ。

勅りゝと。嚴命の趣を伝へ。右門歡びて。墨江に立ち。

櫻子三雲富士太郎にものを語りゆゆ。是より憚る所もなく。彼を

愛憐ましぶ子のごとく養育ば。櫻子も又再生の恩を感じて右門三雲に

仕ること更に実の父母のごとくせ。その年紀は十五にして。富士太郎は十一

なりぬ今少し年月つもれば。家の新婦にまゝと右門夫婦はおもひ

居たりとぞ。いと奇しき縁ゆゑうけける。

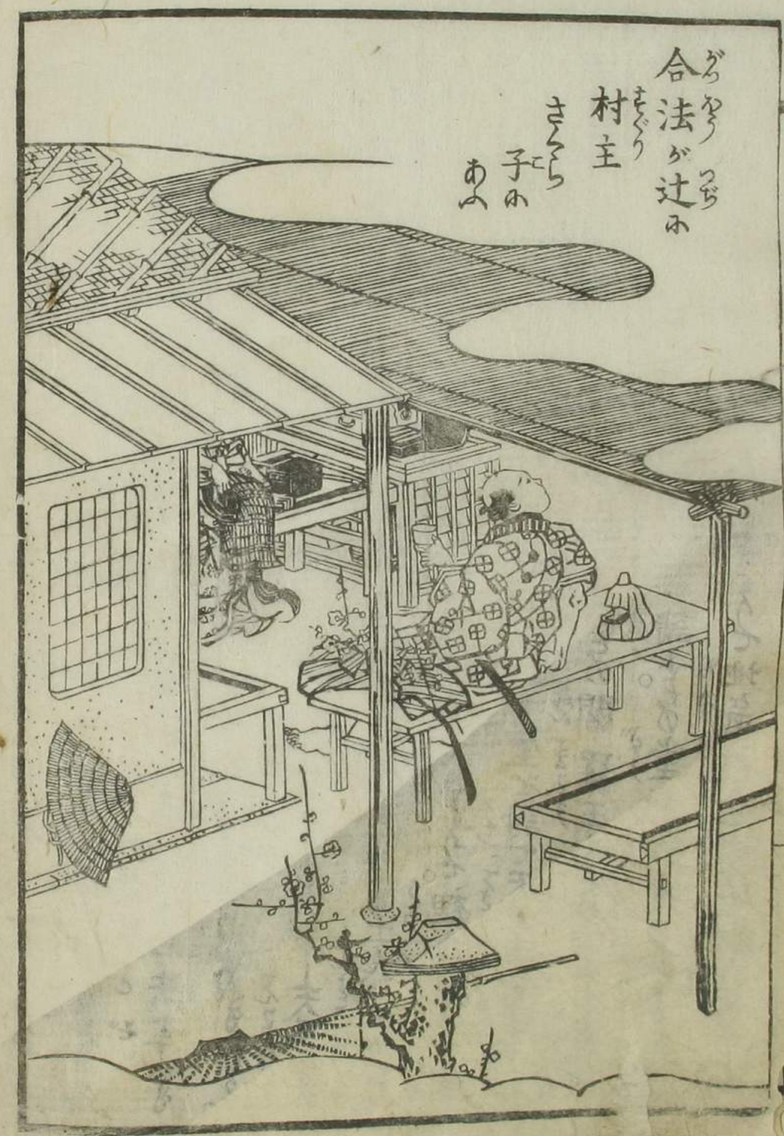
第四編　古廟の焔消富士右門を焼夏

年去り年来りて既に四年の月日さち。富士太郎十八歳櫻子十七歳ゆゑ。ゆゑ。右門い豫て妻ゆも相語て。こぶ児が婚姻のうを都へ願聞へたり。今茲明徳元年三月上旬。富士太郎ゐ櫻子を妻ゐ迎へ住吉の松とともふ久しくうんうを思ひ子孫い猪無野篠原より繁昌うを賀ぐゐ。妹夫の契りも浅からぎ。富士太郎へそのす父ゆも勝りて舞樂のうも大うに傳愛ぎうるうく。櫻子も又女子のうをべき技いこの習ひいて。その心ぎゐ賢く立ゐ志を合せて孝養更ゐ懈るうゐしうて次の年の冬。山名氏清謀反して。洛もいと物忽しうけるぶ義満自出馬ありてより。

御方の大将大内赤松の両雄ちぐ〳〵力戰して。氏清討死ぬとぞ。

都鄙の恩劇立地ゐ静謐し。年も暮春立うるぶ人の心去年ゆも似ぎる太平の時を樂しくて醉翁騒客野ゐ遊び山ゐ遊ぶもおかう。

粤ゐ相坂の清水の西ゐ合法衢衢とのへ地方ありけり。ひろし天王寺の學校院ゐ邊ゐ。ありしをりて。學校衢衢とのへぶきを士人訛りて合法衢衢とぞいふるとの衢衢ゐ古うる堂ありて。裡ゐ石像の閻魔王を安置を往古聖徳太子。弓削守屋を討て天王寺を建立しうる日。石の佛像六萬体を造りうるとの閻羅王もうの一ゐ。霊験今ゐ灼然ありとて。津國の人常ゐ参詣をとの堂や。數度の兵火ゐ脱れいく百年を経うるをいふりをちぐ。ようて地氣裡ゐ濕して。鹹ちのぐ


合法が辻の
村主
さくら子の
あん

焔消を生ぜり。元来堂内床を張らぎ只石の倚子ゐ閻王を居てさ
石の香銭禍を置の〻二六時中ゑて燈明を掲るとまり〻過て
その火地上の翻る時ハ忽地焔消ふうつと。堂を焼ゐ
世の人閻魔堂とハ名ぢとし焔消堂と稱けるとぞ頃〻も正月十六日ハ
閻王の齋日ゆて。参詣の老幼往来ゑび〻も度絶せぞとの日三雲ハ
櫻子とてもゆ一人の奴隷を引ぞ。合法衢ゐ詣づるゐ日来目馴〻
名所も春ハ殊さらの眺望ゆ。江堀口ゆ崇峻天皇の社を拝。阿
部野ゆ兼好法師が旧趾を訪浅緑ゆぞ。春ハ見えけるとぞ。伊勢大
輔が詠ドる蘆間が池住とも変ぬ千鳥鳴るうと鎌倉大臣のよ
のひけん。阿部野の西の阿閑嶋も雨ゆやゆぐむ萱艸塚秋ゆぞ鳴

松出塚家隆の墳ゐど見巡るゐ春日も夕陽山ゐ沒りるまでいざうりゐん
ぞ。住吉のゑゑゆ〻道次ゐゆ〻遮を布て。編笠をふ〻〻。申樂の謡曲ゐ。
小鼓をゆハせぞ。往来の人ゆ一銭を乞ゆゆ〻ゆけるとも由緒ゆる武
士の落魂〻るゆゆと憐ゐもおぼ〻つ。櫻子ハとのやうをるときその人
うち仰ぎるが笠の隙よりゐの〻ゐ見ゑバ。まぐべくもゆ〻ぬ家臣村主兵
衛ゐり。互ゐとハのゐゐと驚ども外の人目を恥らひて言葉ゐ出ぜ櫻子ハ
いとゑ〻〻て忙〻走りるこひをゆゐ三雲ゐ對て目今彼所ゐて見ハ〻ん。
隊で物ゐ〻り〻まゆ〻せる村主兵衛ゐ付るとりハバ三雲もうち驚て
ゑハゆ〻とくも見ゆやまちのゐぶり〻。従者を遣てとゆ招きよせん
ゐどのゐ間ゐ兵衛聽て参りけるバまづとるとへとのひろけて。諸ともゐ

茶店の奥まりたる處に憩ひ何とも言葉いふくて坐に懐旧の涙に
なきびぬ且しと櫻子がいまう也身が思の松原ゆそ藥剤買ふ立入
つて折しもいとおどろく荒男が来りて老曽を切伏せ[illegible]へを
奪ひとりて遠く東路へ走りけるに尾張の熱田ゆそ富士右門と
いふ人に救ふまるらせてふるき庇を蒙り今いその愛子に齊眉て新
婦てよ名さへ呼ばれる是ゆへ姑御ゆそあらそやさて老曽いのうに
ゆりつる也身へ又ゆどそ斯い零落るいとおりとまーとゆへ兵助へ涙を
ゆき拂ひてそまぐ〜往年彼地ゆそ藥買りそ立えりーに。そのところに
鮮血殿〜翻まそ姫も妻も見えどとへいろに驚慌西の方より来
人に問へ。その人のいろく今年紀四十ゆまりの老女向背を切まいるが

その疾ゆもよふまぐ南西の徑を走りゆくを見つるのよさへ山客ぞに出會
老曽へ疾を負て姫を奪ひまーゆべそを追蒐て行つらんとおりゆえたべー
たへべきゆのらねべ既にその途條へ走り去らんとまる折しも又東の方より来る
人ありそのアりけるへ也身何ゆ慌ゆへ今来る路ゆそ奇怪男が年紀十四五ゆる
少女をゆそ住吉のゆえ行を見えうりーとれをゆ索ゆふとゆふ於てらさび思へ
ゆう賊へ姫を奪て東へ走りつらんが老曽へ切伏らまー時その往方を見うーゆい
南西の徑に走去りぬと思ひゆまちそ彼路條へ追行つらん妻へそれゆそ死べ
死ね姫とそ心りゆまりけまと足を踏ゆーつ。住吉のゆまりまで追蒐つるに。その
人へ絶て陰ぞに見えぞ人に問どもその后へまるりのもゆけ見べりーゆ愛悞
ちるゆやと疑惑てりまる齟齬ゆ又界のゆえ走り歸るとき日も昏夜ゆらく

深ぬまで。盡夜彼此を呻吟ふ。十日ばかり。和泉と津国の間を索遶ぶ。
ぶも。姫いさゝか妻の老曽ふもゆゑ。ひとりとせんとべくて。肚
切がやと思ひ。ぶもしの儘ふそ自殺せず。黄泉ふ在を相公ふ見えゝ。のふ解
言ふ。只顕身の息のうち。姫を索まわらせそうば。誠忠を全ふ思ふ復し。
そ是より諸国を経歴して。名ゝ高る神社浮身の宿まで。人の會合ところへ。
落もゆく。索廻まども。四年のけふ至るまで。環會まわらせず。月日いたず為ふ
照しゆふぬと。恨きしふ。神も佛も捐ゆゑ。でその恙ゆを見ゝたまふる。而已
うとも。由緒ある家ふ縁ふし。結びのひしゆ。禍却て福となるぬ。是併舅姑
ゆの深き底ふ因ものゆと。一五一十。説話。只管三雲を拜しける。櫻子ハこれを
聞て。老曽が路ふ死つんと思ふ。涙ゆ落て。果敢ゝしく回答ぶふ。

三雲も。志のゆと信ゝしふ。憐ゆまゝ。兵衛ふ對てのゆ。櫻子がゆ
ゆゝさぐの物がうゆまで。一朝ゆ竭しがゝ。未細ふハ後ふとゝのひて。茶
店を退出ゝるうち。連ぐちて。墨江ふ立ゝる。右門富士太郎ふ備由を告て。
兵衛を見えしゆけば。右門父子。只顧彼夫婦が誠忠を感ず賞ゝ。
家外ふ。祓もゆく。又さる。家臣ゆも養ゆるを。本意ゆくも思ひつふ。
人を遣しゝて大ゆ。僥倖ゆとゝ。より兵衛を扶持してよゆ。懇ふ願
ゆえしゆば。兵衛も又主ゆし。仕へて。ゆく。信ゆふゆを見えける。不題。洛ふ去年の
十二月廿九日。山名氏清退治のゆ。その残黨ゆふ。近国ふ隠ゆひて。室町殿を
傾ゆまゆらせんと謀るゆ。風聞ゆを。防。長豊筑。四箇国の守。大内左
京權大夫義弘。播。作。両国の守。赤松上總ゆ義則。命を稟て。今茲

二月の頃より攝州猫間川のこなたに陣し西国の通路を標てその非常を禁らるさまなど寄べき敵もなく攻べき城もなければ大内赤松の両大将陣中の徒然に堪ねて舞楽を催して暫時の鬱塞をなぐさめとぶらひ当国墨江に富士右門知之あり又天王寺の荒陵に浅間左門照行有ども若しる伶人をまねぶとそ富士浅間とぞ召よせける。ちなみに照行に右門が毀跡てより諸矣の舞楽ゆもしとそ招るるるるーゞ赤松義則の家臣室積平馬といふものに浅間が母卯原が甥ゆて照行と共に従弟なるまゞ平馬只管主君に薦て此度の楽師に加えらるるよりて其前日平馬に照行に消息して云ふの旨を告ぬるゆゞ照行欣ひて思ふやう富士とうれしく遺恨既に久しきに明日彼と共に猫間の陣中に

参ることを僥倖なる。言を設て恥辱を与へるー無礼の過言せばうとき目見せんとひらうどち。次の日花麗に打扮て猫間川に参りしゝ程なく富士右門も来りぬ。斯て盡日の舞楽も果て両大将酒宴を設けるに盃の数もかさなりー時。浅間照行がよもう和漢陣中に舞楽を奏するの例おゝー。就中漢楚鴻門の會に項伯項荘剣を舞しと賀するも。彼二人のー舞楽をもりて剣法をもらぶに項荘も沛公を討とするのつもりなり項伯もまた防とうるーー且項伯項荘は楚王の親屬なるまゞも忠義の為ゆに伶倫の伎をーも辭せゞ君の禄を食りのに。誰も斯とそのべけまさに今の世音律の家に生まれて武芸のとろがけるーの照行が外に絶て変も及ばゞ況きのふけまで鋤鍬りを活業と

せしものハ太刀ぬくまもなくぶつかりあひ見あひ。鼻のあたりをかすめさせ。いとかりうふ心をかけまぶ。右門ハ安てとゝまふ恥を見せんとぞ。うくいのよとを猜し。莞爾とせしかう。剣ハ身を護をもとゝ寶とも。鴻門の會ハ姑く凶禮とものべ。ちくあをどゝ神樂ハ剣を用ふ悪鬼を攘ふの謂なり。吾齊伶人ふるとも。事ハ臨て君の爲ハ一命を擲誠忠を致まの志ハ孰ハ劣るべうもあらぬ。聞ぎや建武の擾亂ハ山門法楚の清衆たゞ力戰して頑寂を禁さ。ちゝを天下の樂人照行の外ハ武藝のたゝ力をもつとハ傍痛くとをといふ。照行と人ハ壮佼なるまぶ忽地肘を張小膝をまくあとハ不思議なる言を吐ものかな。足下寔ハ武藝をたゞぶれ今闘剣法して。眼前ハ勝負を試をいべ。その時後悔ちのひそと声高

ゆふ集燥べ右門ハ彼が對家ハなふんも大人氣なりとハ思ひあぶり固辞ど憶しいふとせちふも朽ちをうけんと深念し。今足下と剣法を試んの聊も難ふらぬ。但貴人の醜會ハけりてふるうぎをせんもいとも畏けまぶとく両大將の命ハ従ひなるべしとをひら自若として驚く氣色をし義弘義則ハ前ようふち聞てあハせしぶこの光景を驚しとハ珍ふうふ見物なるもを與ドのひさまぶ両人が闘剣法を見て頃日の鬱氣をも散まぶし。陣中なれハ真剣のくゆそちるぶき木刀もあらぬ。彼首の鎗牙を除き箇様くハ拵へて富士浅間ハ子へよと命をれば近臣うけるうふ廊ハうけうまとふ鎗二條の牙を抜捨纏槍の上を布のてい重も巻て鞠の如く括標とを両人ハ遥呈しけまぶ照行とハ鎗を取て廣椽ハ走り出袴のそぶ高く抓あげて勢ひ猛く

立ちうけ。彼浅間が従弟なりけ。室積平馬いとうをもぎ七遠侍ふあり
けるが給事ふ往来まる小扈従ども只今うるうあるとうち語ひつたり行ふ。
ひと心りをみけまべひそうふ隣房まで来うつ幕の間ようこまを見る時ふ右
門あがあふ座をうちてそまぶ〳〵ハ鎗をのよ〻及ぎ。樂人の蘭剣法ふハ手馴〳〵
めとそよけまとひ〻うどち。太鼓の抱只一ツをもちそ照行ふ立ひうへ近臣ふる
阽ぶ。阽ぶそさそも富士が膽の太さとさうやきける。斯て雙方立ちれ互ふやと声を
ひとうるを齊〳〵照行鎗をつ〻〻と閃〳〵右門が面上を只一衝ふ刺んとまうふ。
右門抱ふそたうひ除つとうち入つそ腕を癬だうう丁と撃べ照行鎗を打落
さまを大ふ慌て組んとまうをやう〻〻も寄着ぎ沓かう身とよ兵法をもそ再び
撲地と投出まふ照行忽地身を轉〳〵椽より下へ磴と墮まべ大内赤松の両
将をうぐふ。近臣声を揃て右門が武勢尋常ならぎと感〳〵稱〳〵べ照行
ままう〻面目なうて。迎ひ〻まんとまうふ。投らまう時庭の飛石ふて腎を打額
さえ搨傷まべ。半面血ふ塗つ。目も鼻も一ツふよせてあぎ〳〵起もめろ得ぬ。
平馬いまを闕窺て且驚き且憤りまぶ。いろふとも せんまぶ〳〵只草を隔て
癬を擦く心持をとうども。近臣いちもの廣言を憎そまを扶起えとも
せぎまべ右門ゆまうふ見うれて椽より彼鎗を指出〳〵。柄ふ携せそ引起
まふ。近臣ふうやく隣房の伴ひ入るまべ平馬ハ彼が額の血を拭ひ藥を与へ
ぬぐうて。さるぐふ勅りぬ且〻〻七両大将富士浅間を元の席ふ召まを言を
齊くまて宣ふ。汝達武藝い元来その職ふあらざまべ勝とうども譽ふ
ゆくぎ。貝るとうども恥ふゆくぎ。吾儕よき俳優を見て酒宴の興をそそ

右門
闘劔法
なるうして
照行を
撃倒

なまじ。と當座の引出物ありと宣ひて右門ゐ太刀一口照行ゐ鎗一條
をぞ賜ひける。さまど照行いと面ゆけまじ俄頃ゐ病着發りぬと偽り。
酒宴もいまゞ果ぶるゐ彼鎗を賜りて退出けまじ。いく人の胡慮と成
まり。くて日もや向暮とて席上燈燭を掲るときゆもうしべ夜飲ハ
あまうゐ酔興ゆべしとそ。而大將盃をおさゆひ右門も暇ゆうて陣
中を退きゐ。赤烏西ゐ沒て天さ結陰頃も二月廿五日のゆれば。
あわゆもこうね烏夜を。從者ゐ松明を鄉導とし。主從こぐくも
小坂清水のとゆまで来けるとき風いと吹ゐて雨さを降出し初電間
ゆ閃きて。雷さへおどろくしく鳴ゆれば。いく路をいそぎらうドて
今法衣衣ゆる闇魔堂ゐ笠ゆぶりゆるゐ路まぐくの雨ゐ松明もうち

消さまゝられば。くていろふせん。いまゞ夜もいくい更ゞをおゆまゞ汝ハ天王
寺の在家ゐゆきて。簑笠手火を物ゆど買ゆて来よを命じて從者を走
らせ。右門いるいろゐ憩ひ居るゐ簑さ狹き古堂を見ゞとく雨を凌
うね。聽て堂内ゐ入ゆそ是を避んとゆるゐ其處へさ風のまゐ〳〵雨も吹
入ゞ。裡より門扉を引よせてもゆゐ風ゐゆうておのづゆ開を石の香錢
櫃を倚ゆけてゞを遮ゆぶひとり石像のまえゐつゐゆそ。從者ゐ歸を俟ゐ
雨ハゆうやくをやゝゐけり。浩處ゐ淺間照行ハ富士ゐ歸るを待伏けゐの
遺恨をそゞまべく思ひけゞ。俱しる僕をゞ途ゆうゝ。その身ハ一心寺の
邊ゐ隱ゞ居て狙擊とゆゐ雨ゐ降出て右門主從忙しく走るゝゝ
その便宜をゆゞ空〳〵鎗を引提でその跡を慕ひ来けるゐ只今右門ゐ

閻魔堂に笠やどりして従者をば元の路へ入しるを見て大に怒び蜜に窺ひよりて堂の格子の間に鎗を指つけ。裡にて蠢を案内と。窺ひたぐさと刺まを右門こやく身を披び牙先くくひて閻王の石の倚子ゆぞ突當る金石撃して出る火の發と翻まを地上なる焔消ゆると見えぐ忽地地雷の發るごとく山も崩るぐごとの音して古堂もあくに一團の火焔となりて燃上まべ哀ひべ富士右門焔の中に身を集て灰燼となりてうせにけり。照行へ堂内より猛火の燃出るに驚きて遠く走り退くも不用意にして火攻して輙く右門を殺しぬるを怒びその焼落るを眺居る折しも富士が従者へくくともちぐ蓑笠を買もて入るに合法衢衢にゆきて忽地煇の發るを怪み間ぢく走り来る時

火へる扇こと昼のごく明きに見まべ彼首の樹下に浅間照行鎗に携り悠然として停立るさて主人へ堂内にありて焼殺されぬけん雙敵へまきしく者奴るると認められべひそうに田畷をまろり道しるぐぞ墨江に走りて息もつぎあへぐ恐皆こへりにと驚きさらぎ泣く悲しくるを所をちぐるに富士太郎いこの山事を聞とゆぞ力をとうて跨く彼奴隷をゐぞ合法衢衢へ走り行ぬこに村主兵衛に近屬亦の病着發り腰痛て堪がけまべこの夜も富士太郎に從ひ行をめぐらぎ心るぐぞも残り留りしが病をちのぎぞ病牀を起出三雲櫻子に力を添さるべく慰こしらへまこど富士太郎がこのと心りとるくて更ゆく鐘を數まべもや丑三ゆぞるまりける。この時浅間

照行ハ富士が一家を切竭し高峯の大鼓をも奪ひとりて後身を何地ゆも遠さぐやと思ひしらべ堂の焼落るを見終りて墨江の趣く路まぐら富士太郎ら行あひつらんが野干玉の暗夜るまぶ互ふれを走りとして照行遂ふ右門が弟宅ふ潛び行外面ゆて窺へ只今裡より出る人あると見えて門の扉細ゆふ開きて遠く女子の泣声ゆ折とをよけまと黙頭ゆ鎗ぶ門外ふ投捨刀を握りもちて奥深く走り行き三雲主従が圓居しる。隔の紙格をさと押ひらきて驀地ふ切て蒐る。思ひもうけぬるれば三雲櫻子ハ噫と叫びて走り退く間ふ村主ハ主の傾ふ寒る足を踏るふ照行をうけ隔てして挑戰ふとのども病疲れる老人の夜ハ見る目を定るらで打太刀もちどろるまぶ既ふ居夏の深疾を

肩ぬ櫻子元来怜利けまぶとの光景を見るとゆて三雲を引て樓ふ走登り細き肘も手弱女の力をとふ究めゆて高峯の大鼓を打るとまぶ會然音城の鼓ゆも劣らぬ樂器の殊さふ夜ハ静ゆて胖響もゆく遠く安ニ程ふ。近隣の人ハ何ゆぞと騒ぎ立富士が弟宅ふ會合来まぶ照行是ふ驚き怕まぶ刀を引て逃去るぶ兵衆ハ後の一太刀炙呀の深手るまぶ醫療も驗なくとの暁ふ絶断るさまぶ村主ハ病て敵しらぬを恐るとのども雙人を拄へて主を救ひ櫻子ハ又姑ふ過めらんと阻ミ大鼓を鳴して雙人を追ふ仇を見て全を彼といひ是といひ忠孝更ふ比類なくと世の人

高木與兵